

三  
七  
金傳南柯夢卷之二

## 東都

## 曲亭馬琴編次



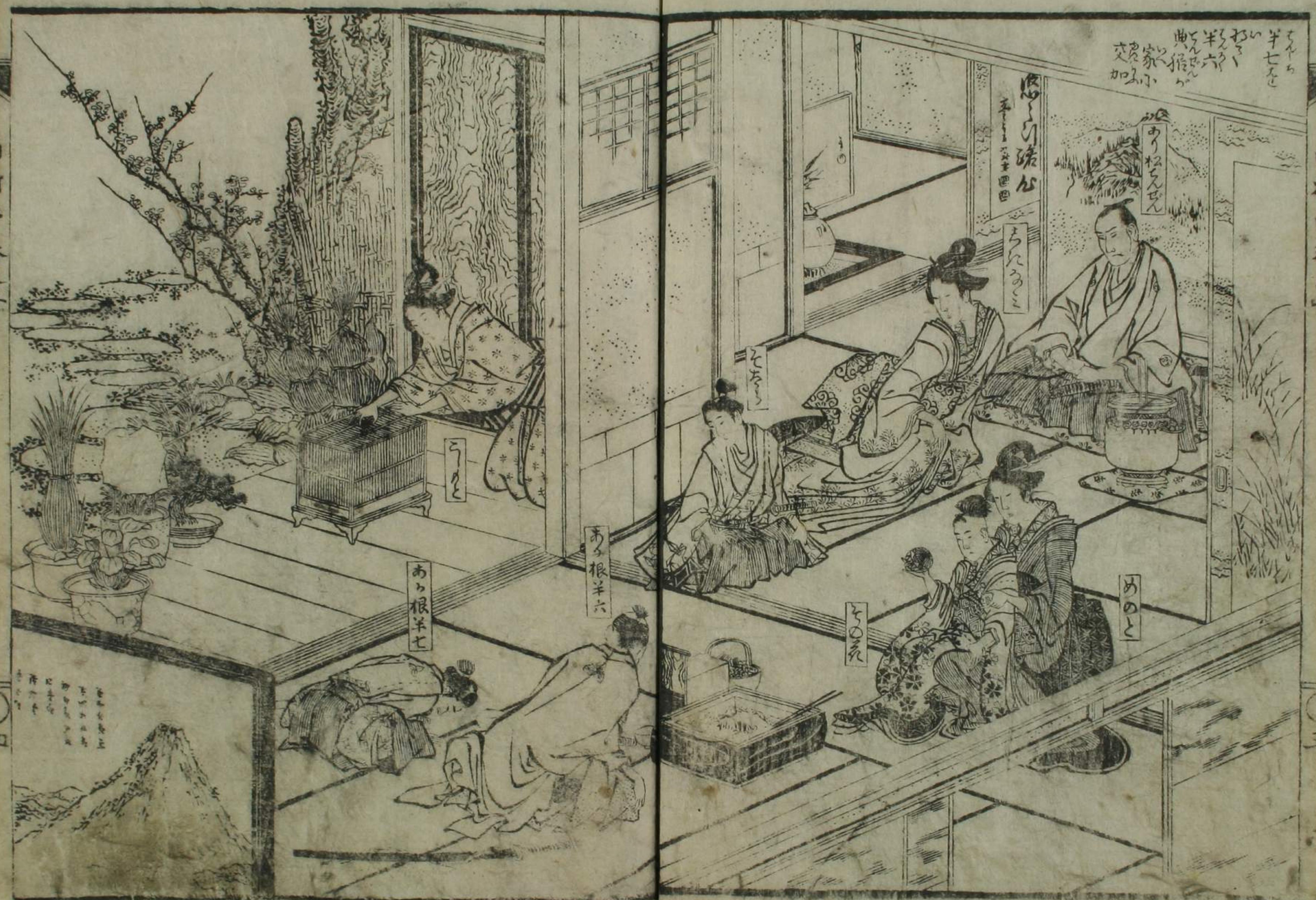
稚兒の娘夫

蟻松典膳豊度へ。曩襄小赤根半六が米告の楠を斫らんとらむ。かねば  
つきへあれど既よ約束の日子すもうりしへ。夥の樵夫をわざく彼山よ赴  
けば。半六は先づらて山の半腹よられを往うけ。輒く爲課であるはとば  
えらじて。うろとも小樹のやう到る小さきの大木。俄頃よ凋然と落葉  
あらむを。二の枝を斫らうと。幹すもとくろく斧の刃を入れてうち。奥脇  
どの欣執りをつゝ。且怪々且放びますをえうて人の才ある才あると貴  
絛をりて論トぐに。野夫より功者ありとひ其許のゆきあり。曩襄の廣言  
空一ノ字にて。領主も卒意遂ぬ。吹舉セテうぶ翁よ干してどつて

凡面目もよき。只脣嘆賞して己を。また少く聊も誇る氣をきく。され  
まみ領主の御威福よりとて。とへり隨々成就せり。さほらみうの庇  
み。もくめ願まうせり。と忘れぬる。ところへく坐えあがめり。べ  
くとくよ典振兵改す。とへり随安うれ。ともかくとて。其許の夙  
願と果せん。とが胸中よりと應へる。またもく阿諛を  
樵夫小對ひ。とくろぐ。已既よ法をり。木精を滅却。そ  
の枝をもじ。の輪よ傷つけ。崇き物をもじ。されば。ものかを  
戮へて挽ぬり。とくろ。樵夫ホホ。面あくびよ。のみ奇特と云ふ  
されば。もみうろせよ。安堵す。あぐが程。稱讚もく鳴む。已  
む。の日を。よ斧もくわとう。件の楠を挽。七間四面の版。二枚六面  
あらん。有在間。小典振もく。四面の版。四枚を。くえ。との餘材。深く。棟とすべたり。一枚半。小  
追あく。と頃。昭縁故を。すく。感悦斜き。と呂の木を。茶  
亭を造。し。これを審雨堂と。あく。くみ歸。南柯の蟻の故事  
よ。稱ろ。じふ思後う。蟻生の當。萬葉。額。有。審雨堂。有。在間。小典振もく。  
頻小までと吹舉。彼が先祖を。弘。正勝の老嘗。ひじとぞ  
子孫凋落。五世より。とく。今小武士の志を喪。そら馬の奥  
義も。とく。家よは。舊の武士よあく。は。う。あれど。家食圓  
く。と。ざる。すが。も。り。縱家よ巨萬の財を。積。と。金銀。矢。ひ易い。  
此度の恩賞。一握の米。よ。あれ。領主の禄を。給。く。家臣の繫  
も。つ。る。多。く。本を。う。べ。と。く。れ。小。の。面。魂。物の用。よ。ま。の。ほ。う  
え。ゆ。あれ。莫大の御庇を。り。戦。を。執。鑑。を。牽。へ。や。と。信だ  
ち。ヤス。そ。頃。昭氣。と。詰。ひ。と。能。を。舉。士。を。薦。る。汝。か。職。み

功あるのみをいふ。賞をばらん。其の序あらば召出だよ。まづ當坐の  
賞従をとくとすと仰ぐ。あらうよ嫡男吉稚丸。今茲十歳よううた  
之の鎧の被初あらべーとて。りそなみ用意をぞくろよ。年果の  
上旬よりびく。茶亭も成就あらじく。順昭是彼慶賀の折がわ  
く。赤根半六を召生。五十貫の新化を賜つゝ。郡山の北方す  
る。五條の村主と命ぜる。かくとま六八年未の宿志を遂て領主小  
井謁し。丹波都が女児ひまんを妻の姪くと稱。輪篠半七とても小  
おき。五條の宿所より移り住み。よ馴一斧をかよ換ふ。一御の成敗を  
官より。林の運送など兵檢する。兵の勢と。日夜より奈良へ仕事  
役より下さる。司うれど。その御すと威勢あり。どの方体小。依  
保の御人ホラホラ。親も疎も。よもよも立身うきとて。義ぬ夫陽

する。水を求る。水をひく。飽とて。更に陽を求む。陽をひく。飽と  
ひく酒をかく。も人慾の頃ひくに不ふれば。また既に足つゝ。領主  
の家臣となると。ども。その職役の尊を厭ひ。小内と近臣の刃入  
入り。うは時をひく。政事より。ゆたりと。暇ある日は親しく典膳  
よ。爐の火を吹。夏は屋裏。うるぬ網を拂拂す。炎天よ井を曝す。  
奴僕のひく奔走。その竈よ。媚よ。とが。典膳よ。放す。二  
死へよ。とめらむ。うの典膳が妻の名を數浪と呼ぶ。家子曾左郎も  
九才。女児園花四才よ。どなりぬ。凡人よ。それをりうとて。その愛化の子ふ  
も。ほら。人情の常うれひ。典膳夫婦也。羊内が児子。よせが萬圓て。  
ひざよりと怜憐をほほえ。かくそれが幸否を倒す。また既不へ便



宜をねりと教び。信しらて答へる。やうとあひだす。某原觀苦の  
中よ養育されば。子を教へゆるもむじとど。身のまゝうりてら。子  
どもよきをえむ習ひ。君の身自の身よ文學は武藝也。ものむがむき  
てんとくひうぐ。師を擇。との容易うねば。すなむのがまつて育べ  
後ともあはづ。男の童へ走まつても健軽。仕事もすうき。老  
さるから小孫もあらべ。わたりはせをほへゆひて。茶のかひみど  
つまらをあひうべ。彼がたよ。大なる僥倖うりと。只管媚といひらへ  
次の日あせをおそく。典振が第よ到る。小曾を争ひて陪侍。と  
うれしこ。そのほとりを離さねば。典振夫婦も。又憎うへどもくつ  
食ふるども。冒ち昂とうとむかそーと。ぶよのエー慈しき。あううよ  
輪轤。その志夫よ似む。またがちかへ奈良へ。がて典振が家よ背  
するを傷痛へとひく。ある日夫よアーヴィング。が身幼くへとたえうつた  
人の教かひを。ゆきよ。君よ侍り。公車よあくされば。執  
權の門よ到らざと。うるよ蠶松めーの老臣よとらすを。日  
末親しく交かひよ。ある日のひうち。とく丸彈。僻る人を  
猾。とぞりひり。所よ。新義よ。あらかじめ。木下。附。草。附。附  
ど。只信すよ。その職分代守り。ことを在と。と。年齒も。生七。  
彼处へま。に。あらかじめ。稚に。の。むつた。と。への怒を惹  
起。ともも。お。か。か。筋。へ。仏。よ。對。て。経。を。説。が。ど。く。こ。く。が。や。ス。を。を  
え。あ。か。ね。ど。が。ば。づ。き。よ。ば。の。う。る。恐。惶。も。う。と。ま。う。ち。あ。い。ね。と。り。  
ありふと。う。理。あれ。また。女。へ。ま。ら。ひ。ま。り。め。う。く。と。の。後。れ  
ま。セ。を。奈。良。へ。わ。く。か。う。じ。典。振。夫。婦。へ。か。う。う。を。そ。う。じ。彼。を。よ。う。迎。

の人を遣す。すとされば。論篠よりよ回答す。さへ年一かれ。筆者  
が。翼より。よちらひ讀書の入門より。やれど。どうひらへらへ。奈  
良へ遣らど。えもさんよも。まことともよ。よみひるを。ごよ人のよ  
の分列す。愛慈ひほど。ふもさんひま六夫婦を。まのどく親のどく小  
敬ひ仕す。孝順更よはす。論篠より。まの舉止をうて。かく教ひ言の  
叙あるとたへ。まさもさんよひす。八年二入がくひとよ生育と過せう  
の縁。一よあくし。月末ひはずつる。久後へくるくぞ夫婦。とすべし。ふ  
くらませ。彼が孤するを憐る。がくんひ又しが夫すりとありひて侮らす。  
互す膝。うちあくといひ諭す。二人の童ひよくものこころとほそ。わくもひ  
きら。出居も諸だす。外の童と。おどり。只一つの果と。ほても。厘  
マニ。よどぎれがたうべど。どとくまく近隣の人も。ものほそをよりて。せよ  
容姿の端正す。むづよの冷嘲と。づれ芳も勝ひど。とくに。一對の夫婦  
きりと稱る。あよ二人の顔を覗いて。物の蔭よ隠よくり。かくこそ次の年の  
秋のころ。輪篠が左右の腕。俄頃よ腫く。苦痛よ堪じ。病と。うり七日。間  
陽も水も咽喉よひ。どもお死ぬべく。あはえり。枕方後方よあり。夫  
夫と二人の童を。えり。とす。またよじり。がくね此度の病氣へ愈へう  
もかほえり。かく。未。を。よひ。うよ。病つて。じり。去。年の  
秋。ぬ。お。う。米谷の補を。伐らん。とく。墓目の法を修。一。う。め。あ。い。う。日  
多く。候り。それで。うの。身。報へ。ん。左右の腕の疼め。二の木を。研。も  
や。崇を。う。身。一。よ。禦。く。夫児の。う。よ。恙。ふ。く。も。よ。う。と。僕。侍。す。  
あり。あ。す。う。ん。後の。む。う。と。ま。七。か。く。ん。が。み。ど。う。願く。輪篠。ぐ  
生の内よ。妹脊の縁。し。を。結。し。て。儀式。整。ど。と。画。あ。う。孟。は。と。し。び

れどりか。すなまとうら辰頭楠の宗うくんとろうるへ究くわ葉が説ひ  
うれどすセヨもんを妻めするゆゑ仔細す。うれども。もんちも  
とそ。十歳。うごも足く。すせむや十一歳の童す。わがめく。すみ遙りたゆ  
生ど。ゆきうかうともうへ。そんともりかとべ。わしもあれ今日ハ黄  
道吉日。うく。目今被ホ。よ益さをき。がさん。が父の亡魂也。う  
らもく。うく。うく。身が命を延。功德是。よすとゆう。と應。俄  
頃。よ。セ。一。被。更。さ。一。輪。篠。が。枕。方。の。左。右。  
對。ひ。せ。し。林。碑。よ。土。器。の。用。意。一。尉。鮑。よ。眺。す。よ。う。そ。て。二。が。間  
よ。す。え。く。う。ど。み。と。れ。輪。篠。ひ。す。お。を。起。一。こ。づ。ふ。と。か。ま。ん。を。と。え。か  
え。涙。を。階。井。と。落。一。る。が。又。莞。尔。と。う。ら。笑。一。室。よ。似。つ。う。な。夫。婦  
う。り。玉。椿。の。ハ。千。代。う。ど。も。眠。を。ひ。く。ひ。く。子。孫。夥。儲。り。ぐ。一。言。あ。く  
や。く。り。す。一。も。あ。く。ね。ど。過。す。む。せ。よ。い。ゆ。秋。母。は。都。ど。み。く。夫。の。斧。を  
り。く。命。を。隕。一。う。れ。い。が。ま。ん。ぐ。み。く。家。う。れ。ど。そ。の。過。を。償。れ。と  
て。食。事。に。と。う。り。養。ひ。う。一。今。ま。ち。よ。妻。め。く。れ。い。す。と。の。文。翁。う。る。な  
娘。育。の。恩。高。に。を。首。て。等。閑。す。よ。う。ひ。み。ひと。ま。せ。ひ。亦。不。理。ある。妻。と  
り。を。忘。れ。ど。久。後。り。う。る。す。あ。り。と。も。生。涯。ら。ま。ん。を。入。捨。め。く。す。か  
く。ひ。く。す。と。も。成。長。じ。く。ひ。忘。る。く。す。か。あ。り。う。ん。至。よ。忘。れ。く。れ。ざ。  
誓。言。と。も。う。ぐ。れ。ば。今。ま。ん。ぐ。護。身。囊。と。す。七。が。と。と。交。易。く。唐  
離。う。ご。う。妹。と。夫。の。誠。を。神。も。憐。え。ゆ。め。殊。よ。も。ま。ん。に。す。七。が。年。才。と  
その。名。よ。象。り。十一。月。七。日。の。誕。生。と。父。母。の。ま。づ。く。字。一。つ。勝。帶  
も。そ。の。裏。よ。あ。り。す。セ。ハ。又。を。ま。ん。が。名。よ。一。負。す。る。三。月。の。ま。も。三。日。の  
誕。生。う。ま。く。う。が。書。つけ。る。勝。帶。へ。護。身。囊。よ。納。て。あ。り。財。よ。う。り。と。



是も又奇くも故あり。其の娘ねむすめらうあたが。百の掛をとかととぞ貞女  
義男の故ゆえ。賢人に人の記きしりけり書かくとももうあり。他一人よなを  
殺ころして母おやが遺言いごんは情じやうをうのみ。不孝の子不義の婦め。よく脇帶わき  
の腰こしをうそせきくとひ腰こしをうそせきくとひ夫婦ふうふがうの誠まことをうそせきくとひ夫婦ふうふ  
又三才のとれよ。列れつに母おやありとすべ。神仏じんぶつは祈念きねんしてひづれすべと  
三味線さんみせんの撥はを割わけよ。環會かんくわ。親子の名吉なよよしをくよ。すせも力を戮さば  
て義俗よしこぞくへよ。序じ�あくび。外ほかうがくが人の往あ行こうをうく。一宇定め。おの  
夙願ゆくがんを果たす。忠孝の道みちへもとく。学がくあべたへ只ただその命めいを命めい  
長くて緒はじかよ。五十年忌けいの季きをうどもうがうれ役えを吊つる。草の原はら  
みくらをう。うめく。ひづれとらふすも。名残なごりを。とびう。小掩こくわん  
小餘こよる恩愛おんさいの涙なみだを袖そでいそばられて。頂かぶよ樹きよす。よしらが護身囊裏ごしんのうり  
をううえさ。夫おとこのう。會あつ禊みそぎまれ。またがく土器つちうきを。ひそんがほうう小  
さうつら。二十九度の勧杯うげい。今いま戴くく親の恩。すせも諸しろとも小母おやの教  
訓くに。身み入いる。床ゆ。獨ひとりを味酒みさけの三輪みわの芋環いもわ。と。婚烟こんえんの式果しこく。  
ワわく。後輪ごりん篠しの。一言いつごんもアのりふとす。とびう。臨終りんじゆを行おこるが。その曉あ  
昏くろ。弥陀みだの宝号ほうご十扁じへんうう唱うたう。卒そつ去よう。と。縊くび。ね。と。ひ設つく。  
みくら。今いま更よはぼううく。すが愁傷しゆきょう。すせもさん。天あまよ叫さけひ  
ひよ倒たおれて哀悼あいだう。紅淚空くろなみ。枕まくらを侵うなぐ。さてもわづか。小わづれ  
ば。すた。次の夜よ。妻の送葬そうそう形がたの。ごく。宮みや。丹波たんばは都つが一周忌いちく。も。日ひ  
當あある。と。りく。共とも。よ。經誦きよう。と。追薦ついせんの仏事ぶつじを執行じゆぎ。ひそく寂寥きりりょうを  
以いをひう。ぬ。

さう坂さうざかの僕わらわ人ひと

待とひきよすたへ妻の忌果一久。舊のびと仕て典膳が宿不交加  
もる。もとめよ親しりうらう。もうれどもすせへ往よ輪篠が隣て後へ  
奈良へあくとさし程よあつ日典膳夫婦。すみよりやう。むるの意小  
稱ざるすん。久くす七をえど。さうすどひらも徒然がらうふ。曾太  
泉玉を花と端なよ南圓堂。まじて在山をとらむ。母のあたすれ  
いわ良服にうれのゆも便すくふ。翌へうらうど羊七をわく未(立)七日と  
ふ出る。むち苦へるがむとりよ。すみすて。今よそぞめぞ。く懇切小  
字あく。親子が僕伴う。亡妻の性遠慮あるのあうられば。稚た  
くの親くある。罪ねがうに不移くとく。ゆくのを固辞さむら  
ひ。室ふうをはえあくせんよ。す七もことを故ゆる。追死小おて  
ひ。ぬくべーとく。立條へゆるとぞ。羊七は縁由を物語りて。奈良へ  
あけどり。すせの母の遺言を守りて。出よも入よも。もんとくろせんと  
笑う。うぶうう奈良へりとを教ぐと。さんも又彼を教く。うを  
喜び。うりひ懲りて。偕老とほろまれ。あうがうくる程。う  
羊六はとくとあほ。す七を曾を席が武藏の師よ入門して。日暮  
ユ奈良へがよ。それを修托よ典膳がかく遣り。かくとぞみさん  
も留ることを。すせも推辞ぐと。とあく奈良へ赴く。晝古果  
と後曾を席よ付れ。典膳が家よ。日を暮るとも多う。え未怜  
制を童うり。あすの夫婦。その動止戒え。只顧よ稱賛。ある日  
典膳の妻の敷浪よりみす。女眼圓花。僅よ五オきれど。女の童の大人  
ゆも早くれば。孫へうづ彼うじえづだ。うづへ今うづ督を擇  
て生涯を安らうよ過せりん。親の慈悲う。それ日未す七が舉止

をさんよ。どの才の長なる。廣く奈良の藩中よ。二入とある。うもとえど。彼  
がえすたへ。新主あすと。五條一村の吏され。さぶ女児を遣嫁とへなれ  
きねど。かゝる筋の期よりびと。ともかくもさう。人ぬがへりて喪ひ  
易ぐれど。さう羊の情由をもくせん。彼が回答をげどやとかりゆす。  
ひ身がこうろひゆぢやと向よ。お浪もぞ。參思して。まじがみ。うがおも  
さめいざる小あくわど。近属人のりぬをすむるよ。またが妻世よあじ。時  
それが妙の女児とくもんを養育。後へまづよ妻あらんと。假小娘日  
ひの孟。さくふをぬくとぞ。アラの言實よて竹すう。相談のみと。も  
うひきしん。よや彼へ。の方が縁高く。威權あらば羨え。異議あく羨  
引すありとも。初めようひ名つて。妹脅の中を引裂て。園衣を遣嫁  
ん。議を惹の媒あらむ。よくらひむじ。あひわと回答すれば。典  
て。吟咲ひすせらるは總角。さあよ。婚姻をとう。締づといひすり。そひ  
謂う。どとくられくあれ。南あくうまむよ。間とことくとくに。若黨何じ。  
外面より。障子を細す。押開なし。赤根氏の諸未ぬ。アヒと青す。モ  
膳はもあるべど。それこそとく。若堂の障子を舊のひくはこ退生。  
敷浪も次の間よひの。浩然よ。嘆ニツ四ツ。と。半ての書院の様物。ひ  
かひり来まし。その安否を訊問。さくひを。木の系簾。と。手を  
さじて。師走。うつも却く寒。ケ。られを。かくべく。某毛を引て進ら  
せべ。とりひく。携未。さる。被色。戎うち。昇ら。さく。と。のをそね。  
鴨一番を。青だ。目籠。のれ。す。興居。を。の。志。の。ほ。く。ま。と。欲。が  
うち。爐のほ。と。よ。お。た。し。四表八表の。諸の。序。よ。半七が。怪利。を。稱  
て。ひ。ま。う。う。れ。久。後。へ。女。児。園。衣。を。す。セ。よ。妻。あ。ら。せ。ん。と。呂。が。ま。あ。り

といども其許の内室せよありとした姫女とすらよりひ名つて。半七  
妻と定めたり。風はあ。とてりく。かくを秀へ。そのゆ實  
言うべと向むべりられをみて。満面は笑を含む。ことひわくねり成  
りあり。のう。新系のまたが覺ふ。の老臣の息女成。妻あり。あん  
とすする。それと。實言とも。まえり。亡妻が婦の子の死す。成類。日  
あ。これとある後。臂を握る。その家を終とべたれ。されば妻  
すへあ。と。彼ホグ年紀も似つて。くじかづけよ生育をつく。  
さる風すをする。ありと。ま。推量の説うれ。論す。小足と。と。  
誠す。よ陳。曲。脇急。勝をと。め。あらすと。の婚縁繫  
あ。よ。かく。今。人々よ。ちじが。お。お七。齡三十。超園。老。二八の  
春を迎。よ。よ。すきを。よ。よ。と。う。其許も一等をすと。すや  
新よ。は。佚。縁父よ。務。せんと。又。親子。りうとも。小。舊の柴賣よ。みさんと  
う。が。公。よ。あれ。のも。仍。り。の。室。り。じ。よ。其。許。よ。異。儀。う。く。よ。の。幸。の  
ち。じ。や。よ。め。よ。一。獻。酌。べ。よ。か。ま。六。か。く。欲。て。じ。う。婚。縁。を。破。り。と  
よ。く。意。の。隨。よ。罪。あ。い。み。よ。と。恨。ほ。と。り。が。と。の。と。數。浪。の。屏。風。の。後  
よ。う。出。く。ま。六。よ。挨。拶。し。女。児。が。婚。縁。と。の。ひと。放。り。だ。よ。を。す。え。が。一。彼  
鴨。を。烹。さ。一。お。ほ。種。ぐ。の。殻。を。添。く。寶。玉。三。人。酒。り。任。と。終。日。相。詣。ふ。ミ  
ク。や。り。くれ。れ。ま。六。と。す。す。立。食。肉。の。便。宜。び。ひ。て。そ。や。老。臣。み。す。昇。進  
み。よ。こ。じ。つ。遂。よ。お。倫。篠。が。遺。玄。を。用。ひ。ぞ。慾。る。義。を。も。誓。を。も。忘。を  
と。す。よ。く。典。孫。夫。婦。よ。眉。僕。と。顧。る。が。児。の。成。長。を。経。る。び。て。引。も。伸。き。ま  
ほ。ん。よ。つ。り。て。か。ぱ。ん。と。深。念。す。よ。す。あ。た。ま。よ。絆。され。そ。輪。竹。篠  
が。幅。終。よ。お。ま。ん。を。ま。と。妻。と。定。め。り。た。と。れ。彼。ホ。童。こ。ろ。み。む。母。の。遺

笠松平三奈良よ

膏薬と賣る

元祖熊膾藥

笠松平三

元祖

熊



言うりとて、ひと睦一くのすうよ年闌と。ひづれ引離す便あらへど  
のとたうの故障小うりて蟻松氏の婚縁。づくはとあるとあくびが親  
よりるるゆうにめあらんも量うべし。あくべくとむかへりて密  
あらんを追ひ矢ひ後の患を絶よへあうべし。びつよらひ定めて、がく  
の漏うみ小易いとくひるくくふを動うまぐ。りくもくそひの便宜を  
窺ぬ。小亦近曾奈良の大佛の脇う小笠松平三とひの安商入ありつ  
て。の平三の原浪速人うし猿芝居の俳優を興行し。伊勢の古市泉助  
堀。尾張の年奥知美濃の稻葉山。周防の山口長門の下関。さて  
都會教系花の池へ到らざる曲もうちしげ。去年の十月五七人の俳優をねど。  
西國へ赴くおへも難風よその舟を覆され。俳優ホラミ太奥の腹  
薙ぎられるとよその舟ひ辛じて沈没舟よ助棄られ。奇しくも活残れども。  
遣らぬのり行李銀すと急化生活の本筋をうきひづかとちぢれど  
あきふとかくよき奈良下さり立帰る。川上の南小寺に猿宿をりとあ。同  
海よ大仏のほどう小坐てあく延布す。鐵亀戦の膏葉を飛散ぐ。とお打拂  
ひふとされば前あく首尾具足する。熊のほを置いて熊膏葉とくみ三個の  
文字を筆墨よ字しとる。紙の懸をあく。漆塗の瓦巾を戴て丹田山  
木綿の古布子小ぐらうの袖うそをとぞり。あく貝よ入れ或い紙小押詰  
くる膏葉を外とぞまとよあく。鳥獸の聲音を似せく。往來の老  
弱を集合一ふべく。彼を順て熊の平二郎とぞ稱す。折りあと  
赤根半六。高天神のほとうよ所用ありて大佛の門前をひ。一件の平  
三のと暖氣うる日南方よせをと。彼此入よ對ひて。高すよつす。世不  
敵敵のまへ夥あれど僕が製すとこうり。とおまごく熊の脂よ家傳

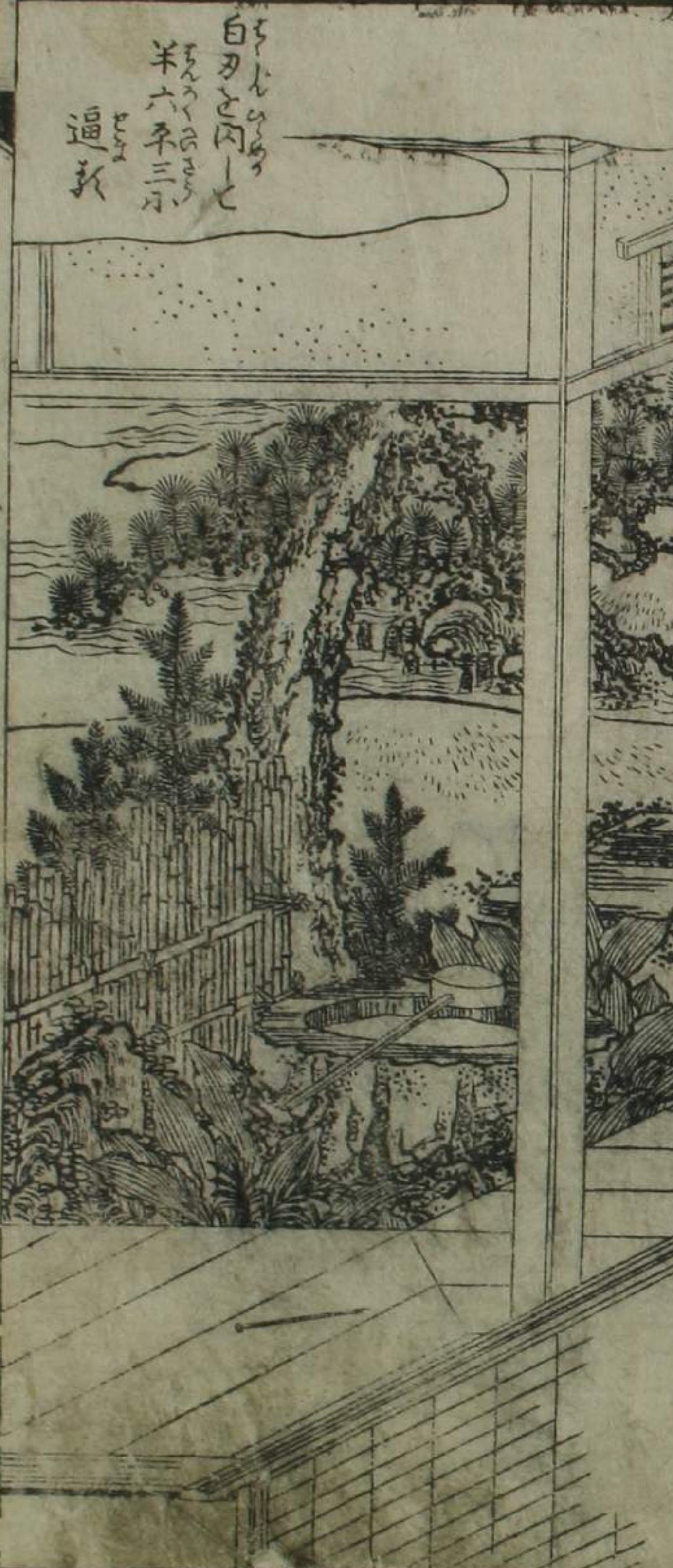
の草種を煉あり。そば衣服よ。ア。又痒觸セド。ト。ア。び用るへ。一切腫物  
の根を剥。その功神のぞ。是則周の文王の夢。ヨリ。ヒ。く。お。熊  
脂を用。三國の名醫。華陀が製。シ。レ。セ。ト。華。ヒ。ア。人の妻。端  
娥。ア。盃。月の中。よ。き。る。宋人。川。よ。生。布。紙。洪。よ。通。伐。う。ヒ  
き。僧。人。よ。は。授。セ。ト。吳客。が。もの。法。を。百金。よ。買。と。軍。よ。勝。と。  
妙。茶。あ。う。り。僕。弱。ア。レ。ヒ。と。鶴。夫。う。レ。ヒ。が。ある。日。山。中。み。く。異。ト。う。ロ。こ。め。茶  
方。を。授。モ。ア。セ。助。と。も。う。れ。ヒ。と。此。度。人。の。薦。よ。う。南。都。よ。出。て  
賣。弘。る。う。の。の。膏。茶。一。貝。を。買。ウ。人。あ。れ。鳥。獸。の。声。ヒ。ア。ヒ。ア。ヒ。ア。  
サ。ア。カ。ア。ナ。ベ。ト。往。昔。よ。鹿。笛。鳴。笛。う。ど。し。笛。を。り。く。もの。音。を  
似。ち。ア。め。づ。ら。く。う。ど。ん。鳥。獸。ハ。引。音。曲。音。急。促。音。の。ニ。ツ。ア。リ。セ。不。正  
半。獨。の。音。う。れ。が。う。く。セ。ー。も。人。間。と。互。う。ア。レ。ギ。彼。笛。ヒ。リ。セ。す。ヒ。

詠。言。ハ。大。の。く。ん。と。鳴。嵐。の。く。う。と。鳴。熊。の。く。ん。と。鳴。鹿。の。く。の。と。鳴。又。鳥。の。り  
あ。く。家。鴨。の。ぐ。や。つ。く。と。が。く。急。促。と。く。う。隠。く。と。響。有。る。真。の。鳥  
獸。又。比。き。く。笛。の。な。べ。と。よ。あ。う。ず。の。く。そ。の。妙。ヒ。ジ。る。の。り。唐。山。よ。く。益  
嘗。君。ア。鷄。鳴。の。客。日本。よ。く。か。く。り。か。平。三。よ。一。人。の。ミ。ア。ー。こ。の。中。小。犬。の  
叔。母。さ。よ。家。鴨。の。妙。れ。き。ど。り。在。さ。ば。僕。が。ヤ。ス。と。う。ろ。虚。う。り。や。實。う。り。や  
よ。く。う。う。て。あ。う。と。べ。ー。と。り。よ。立。こ。い。る。老。弱。叫。く。笑。ひ。と。膏。茶。茶。を。買。も。あ  
と。買。ぶ。も。あ。う。と。め。が。ま。き。よ。う。れ。去。そ。ね。赤。根。半。六。う。嚮。よ。う。人。の。後  
方。よ。立。在。く。窩。よ。卒。ニ。よ。暗。を。見。忽。比。よ。謀。を。生。ト。人。の。別。を。散。を。行  
應。よ。卒。ニ。を。物。蔭。よ。招。た。く。声。を。低。じ。言。卒。余。う。わ。あれ。ど。それ。の。領  
主。の。御。内。よ。く。赤。根。何。ア。ー。と。呼。う。タ。ク。の。し。今。彼。处。よ。そ。汝。が。面。影。を。了  
よ。世。を。逝。ア。ヒ。ア。ソ。ア。ヒ。ア。よ。く。似。う。の。と。あ。う。ど。そ。の。声。音。ヒ。ア。違。ね





赤根羊六



逼

大柏の権利

ふ一のひまへる。ふり  
うそ小もの吹の日。輪縫が百首の速夜さわらひふ。赤根せんげ法

師より経を誦へ。又親しん友どもを招ひ。物食ふる。すと。ばかづれ客も  
帰る。よきれべ。また。せとともさんより。ひやう。化保を。四里。よあそつ路み  
る。よ。はきら。まご。稚くれば。一度も母の墓参をさと。さり。翌日。卒哭忌  
ゆく。仏事。続願の日。あるよ。まかう。ほひよ。願成寺。まとう。詣べ。づ  
とあく。起ぬ。とり。が。よ。せむ。あさん。ひと。あか。ある。氣き。よ。の夜。お仏  
堂。香り。とき。あら。だよ。回向。つ。常。よ。う。ほく。み。う。れ。ど。す。ご。曉  
す。わらう。よ。起。出。ご。浴。一。髪发を。結。已。用意。既。よ。整。ひ。く。ば。よ。六。つ。一。般  
の。轎。二。入。の。童。を。衆。と。奴隸。ふ。よ。輿。し。ま。ぐ。う。轎。よ。引。く。ふ。と。願成  
寺。ぞ。諸。る。い。く。と。す。れ。ど。冬。の。月。短。た。小。被。处。よ。到。て。す。是。彼。小  
時。を。う。じ。ゆ。る。比。及。よ。日。も。西。山。よ。傾。よ。ど。よ。あ。へ。轎。夫。ど。も。が。杖。も。る  
隙。も。行。く。び。ー。と。途。う。す。ま。せ。あ。さん。を。歩。せ。右。よ。左。よ。と。く。り。と  
ぐ。か。二。入。の。童。り。う。く。よ。あ。よ。う。ゆ。る。が。氣。も。く。り。と。岩。屋。谷。の。東。う  
る。豈。田。の。山。本。を。う。よ。天。さ。く。結。陰。く。今。よ。暮。も。く。う。づ。で。す。き。れ。足  
の。運。び。わ。殊。く。よ。き。み。く。九。わ。す。る。山。路。を。端。く。し。と。る。わ。ー。も。一。叢  
敷。繁。ん。枯。尾。花。の。さ。く。く。と。戰。ぐ。と。え。ー。その。欣。憤。の大。サ。と。く。る。荒  
熊。忽。き。と。跳。て。出。矢。庭。よ。あ。さん。を。し。銜。路。を。横。ぎ。う。暮。直。よ。雄。ま。の  
山。立。て。や。一。奴隸。ホ。り。よ。か。と。え。ー。また。大。よ。放。す。た。く。刀。の。鞘。よ。あ。り。  
り。それ。ど。左。右。う。く。追。出。山。よ。登。ら。ん。と。する。を。さ。め。忙。く。引。出  
ふ。ま。七。奮。然。と。差。を。揃。て。續。く。山。よ。登。ら。ん。と。する。を。さ。め。忙。く。引。出  
や。よ。寝。仰。気。を。変。て。竹。比。一。西。く。ぞ。と。向。れ。と。父。を。傍。と。え。く。引。出  
室。す。う。じ。も。す。看。く。あ。さん。を。盤。獸。よ。銜。去。う。れ。何。の。面。目。あり。と。立。候  
て。あ。り。う。び。た。う。う。な。う。も。追。蒐。う。讐。言。を。刺。出。ん。と。き。う。の。外。化。あ。す。



其所放ふと回答もあらず。うれしく追んとするをす。つい扇うち袖を放さざる云々なる。汝稚くれども流石ようぶ兜うり。武士の家よ生育たりのい。誰もかくこそあづけり。ちつともどもその身の力が底量らうべし。匹夫の勇力よ健うべのを。せよ野猪武者とて笑ふぞ。うやむひ勇力くとも。十一歳の小腕よそ。彼荒熊よ鬼向ん。薪を負ふて火よ近づた。石を抱たて開く偏ひそむ。うつむきよ危し。かくらんがゆの惜めどもうへど。ゆかりうともよ命を墮さば。父が哀傷ひづむぞうりことやうふ。さんざんかくあるゆのを。仍ふも命の運の係るとどうと口ひ諦め。うかひこの手によまぬり。さて鶴夫ホヨ巻彌さうじ。かくらんが鎧言を復ふべ。あうれとく苗人や。親の諫を用がる。おあうね孝うり。とくくありゆとりふ。理よ迫られず。またハ眼中ハ涙を含み。山と向よす嘆息。せうひうへらひとふようりぐり。かつて赤根半

六うき。五うきをわく立様へ立ゆり。その夜の中よ令もくーと。駿の鶴夫を催。次の日うき。豊田岩屋谷の山へと巻彌まどる。えまうの處へ高峯よもやくねば。鶴きづの出ゆる。絶えずまどとく。鶴夫ホヨ不審きず。七日あくまうり。鶴くじくれど。終は本意遠ざかと已ぬ。またハ又かくらんがゆ熊を殺す。怨を雪せざるをひとと遺憾とひそ。江官被が不まを悼み。その日を亡日と定めく。母の位牌ともも。因々香花をまよきを。おの教父とて往よ。父の才六太よ練る。稚にののうれ似りき。も。忘くへん念佛三昧うす。うやうか。小焯とも。元へとさうのくわうか。ど。勢うひまえゆくとつ。またハ父の仰よはらんゆをむかれく。もの後へとくめびくよ看經し。乐へとくどぞ日をもううりぬ。そへとぞむだ。かくらんがゆ日。豊田うき。山本よし。荒熊よ含去られ。山よみる。十町あ

あり。更に傍へるふ持りぬど。今ひどとぞひづぶ。すこよ邊も叫びぞ。  
ふの中よ神仏を念じつ。彼がまよく引きやくば。熊の山すくつてお  
さんをやきねかうへるが。直よ喰んともせど。急ゆ人のごくえく  
うづ後方をえくらむを。がくんひよ。おもに怪え。逃とも脱げど  
おひく。さうびれもどくら。騰て居るよ。彼熊人の諦めづく。さく  
さくる物へそりん。どひづく。さがく。胸のあくよ。そのはを引  
めうて。くと巻をそねば。年の齡四十あまり。大男が熊の打  
ちかく。さうく。尋常の女の童あり。男くそに舉止ひとす。  
たよ。がくん。の放物をそく。おも野を。さく。熊とぞひづく。獸も  
かと。さう。盜賊。さく。あうつよ。はくろ。を。奪ひまく。街  
賣らん。かう。縦えを。費うとも。穢れて。隊よ。べそ。殺さぐ。と  
く殺ら。とく。の氣を。從容。うく。先を。ざわか。それ。健氣。さよ。彼男  
の舌を。巻く。不覓。感嘆。世よ。怜利女。子い。あきと。ひく。身が。ま  
を。つを。うれ。愉。兜。杜。騙。す。わく。ど。又。人肉。經紀。す。わく。ど。人よ。のま  
せく。かく。圖。つ。う。と。う。が。く。ん。す。く。ん。う。も。け。れ。せ。く。が。良。を。引  
剥。ら。ど。又。花。街。賣。ん。と。も。だ。ど。伴。ふ。と。も。み。う。ひ。く。ん。ど。も。何。人  
よ。み。う。れ。る。し。の。名。を。ち。く。で。と。く。べ。大。男。う。ら。と。見。つ。短。カ。フ。着  
う。割。掃。枝。を。う。り。出。一。小。女。う。れ。を。認。め。う。や。と。向。よ。が。く。ん。う。は。不。審  
う。が。く。ふ。よ。よ。う。う。と。熟。視。も。赤。羽。飼。子。よ。銀。り。く。相。の。禁。よ。大。の  
字。の。紋。あ。う。が。く。が。く。あ。く。ね。養。父。羊。六。ど。の。掃。枝。あ。う。う。ど。や。と。く。  
う。と。絶。持。れ。が。く。く。が。精。や。よ。違。つ。ど。盜。祇。あ。う。う。う。ど。や。と。く。  
ま。の。掃。枝。の。や。密。よ。身。を。殺。ら。と。く。それ。を。相。諦。禪。の。ごく。

うつへる。のとよひてゐを疑ひてふべ。その故に如きにあり。圖様にて  
うそく。奈良よりまよ酒を強られ。金と掃枝をりくる。まよ  
あらんを家よ養育し。半六親子が仇とする。づて情由あり。密に  
殺せと。ひきれり。首尾を説きし。づて血ひ蓋松半二とはども。  
賤な活業へされど。不義の黄金よくち悉ひく。人を殺すのみ  
らどあらんあれ。羨引び。そのせをあらば。と責し。實よどひ定めゆ  
氣色ふれべ。己ことをひど領掌し。一旦あら計るといふとも。ひそかにと  
の小女子を。助さんやのを。と深念一つ。必ずよ至ら一ヶ。今四才の奉  
止をつる。壯士もあらびびじ。よつてまよを。彼人の奸惡を推量り。  
更に身のひとを。くじ。情ふくも無ふく。悉ひどり。一臘とうも。往  
んとく。直よ華洛へねまへよ。ともく。アリて難育べ。はおがどうろ  
りよどり。あらんへ縁故をすま。どうやとよと声を立候。あらん  
袖の間よ。あらんをうな拭ふ。さくひきよ。過世の恩業から  
う。母三才の年よ別れ。父の非命よせを去て。あら生。母ともに  
のとし。の人もおさうして。今へ一への養父の。老いたかの後よ。ぐも  
反呻の孝をあらんと。あらひきよらひき。殺んと。まぐ小憎る。何  
過のあら熊よ。あらぞうと。じあらんと。アリヤ。凶のと。うろく。命を  
助らる。と。あらぎあり。と。養父の。まセどの。たぬ。どと。笑て  
五線。あらぞうじ。アリ。うなを憐る。難ひとう。あら。べ。辛か  
苦のせ死する。親よ。ほく。再生の恩。化よ。ひ。ト。うざ九才  
の女。童。が。ま。と。や。あらんが。アリ。およひ又。情原めうと。齡。う  
小あるとも。母女妻ひ。あらんが。アリ。およひ又。情原めうと。齡。う

ありまく。命の惜れもそのなかうれば。まへて後よりやるふ。この一條の妻  
引ちう。旅た活業よせを済とど。推辞ひしと回答へふ。廿二年も  
まと嗟嘆して。それこそとも好ねば。年四十よりうれども。妻代娶ら  
む。肉胞もまたよつてとおつての病ひ。老後のものとばひ。不  
そりしよ。天との小女をあつる。もうさう幸福なり。む安うれ富貴の  
家う。縁一猪んといひするとも。ひ身が情慾に破る。月もく暮る  
小とくへとく。アモルカさんを脊員ひつ。夜よ紛れて山を走り。り  
直す華鎧へ上りく。またがふらる。五方両の金を本錢。此の生業  
二年月死かう。ねじよ干て。かくん。父丹波は死ぬ。母の。す。六輪  
籠。又如此ごくの故。よろく。ひととく。まセと。妹脊の縁一を  
帰る。審よ物ぐれが。半三りと至半と。貞操の心すくまを感歎  
し。因その薄命を憐みゆく。彼が母よ環金。やんとく。きり、  
その仕方を索し。ひみこころ。甚洛よ。笠屋夏と。舞妓あり。原  
是向指子の流よ。世よ。あくと稱ふ。やめ越前の辛稚。よ。笠元  
率洛よ。上りて能優をすく。今。の夏よ。至る。やくも。かく。  
彼辛稚。桃井直常の子孫。うりと。舞の詞。戦場の故。せき  
の景迹。恋慕の癡情を述く。その音曲三十番。うりをかく。管領  
執ふ。うりと。酒宴の席。うりと。彼夏を。おひゆい。範。小。の  
家。も。う。衣食よ富ね。又。平三。年。末。旅。せ。之。居。を。持。す。され。甚が  
來。よ。疎。う。ど。さる。小。う。く。かく。を。被。が。房。よ。と。と。舞。く。を。わ。ら。る  
よ。づ。づ。四。五。年。う。て。その。技。を。持。る。が。顔。色。の。艶。妖。う。る。を。得。て。月  
も。忽。ひ。雲。よ。隠。を。容姿の。う。う。う。よ。く。が。それ。く。へ。是。も。羨。ら。く。風。



かぶん

秋くとしき

名を三勝と

更ひ

笠屋三勝

笠松平三

唐宋八大家

家の瑠璃樹と鍾愛して。三つも年の衣裳を背負ひこの履をとろ  
了。主君の多く小官待を三勝ひうりうくとめく。この物体うくも竹  
るつみ。かる所なをうこづか。身と美りゆかひとと。おがく諫せどもう  
は聽どすとく他ようく冊たゞり。  
村田

三七全傳南柯夢卷之二終

開卷百笑全二冊

松亭金水著

全二冊

此書を儒者と佛者の説教異  
乎てを若男如大もくり安死  
やくふうぬほけう。小六長四代  
消一七夜の宋帳とあぐつう  
け上もまた一書の冥示と聞き  
えれそ難ふ笑と催す。然あ  
嚴格の人より人よ絶倒を考  
みまし。一後こそ死參百笑也  
詮を食虚あるを知り。且

浪華書房

心再稿通博芳町角

河内屋茂兵衛藏板

